

## 「いちば」の起源

(いきなりですが) タイムスリップしてみましょう。

ここは18世紀初頭のニューヨークです。

あなたはオランダ人がインディアンから買い取った島、

「マンハッタン島」にきています。

マンハッタン島はハドソン川の河口に位置し、

入り組んだ湾によって大洋から守られた理想的な港町なのです。

この島では、さまざまな人が行き交い、農産物、魚、石炭、工芸品から、

木材、貴金属、書物にいたるまで、あらゆるモノが取引されています。

一日に何百件という売買が行われる、まさに一大交易地なのです。

たとえば、綿(コットン)の現物を100kg 港の近くに並べて、

売ろうとしている人がいます。ところが、その場で商品を引き渡し、

現金を受け取ろうとするとたいへんですよ。

そこでいつしか、綿(コットン)を100kg 所有する権利を

『紙片』にしたため、それを(港の近くの)交易所に並べるようになりました。

現物の商品をいちいち確認する代わりに、この『紙片』によって所有者を確認し、

お金のやり取りが行われるようになったのです。

(もちろん、お金のやり取りもやがて、銀行という「決済機構」が担うようになります)

ここでのポイントは、コットンを100kg 所有する権利をしたためた『紙片』が、

交易所(取引所)の「お墨付き」をもらうことで、

**ある種の『信用』が付されるようになったということです。**

あるいは、お金を貸す、借りるといった行為はどうでしょうか？

(商品がたくさん存在する場所には、自然とお金のニーズが発生しますね)

ある日、Aという会社が、Bという会社に「お金を貸してもらえますか？」

と呼びかけました。B社が承諾してくれたので、A社は、

「えー、確かに1万ドル借り受けました。年4%の利息を付けて、

5年後には元本を必ずお返し致します」という「借金の証書」をB会社に手渡しました。

B会社はこの「借金の証書」をそのまま持っていてよいのですが、

あいにく5年も待てる状況ではありません。

そこでB会社は、この「借金の証書」を第三者に売却することにしました。

この借金の証書（紙きれ）が、交易所（取引所）のお墨付きをもらい、

ある種の『信用』が付され、B社からD社、D社からF社へと

自由に売買できるようになったのです。

（この「借金の証書」こそ、今日の【債券】の原型です）。

また、交易地では会社を設立しようというニーズも生まれます。

では、会社を所有するとは一体どういうことなのでしょう？

たとえばFさんが、「ボクはあなたが会社を作る時に、1000ドルお金を出してあげたよ」

と言ったら、Fさんはその会社のどの部分を、どの程度所有することになるのでしょうか？

実は、株式会社というところは、

【株式】を何株保有しているかによって、会社の所有程度を示してくれます。

会社はFさんに、株式会社の所有を証明する【株券】を発行し、

「あなたは確かにわが社の所有者」です、という証（あかし）を与えることにしました。

その【株券】は、交易所（取引所）の「お墨付き」をもらって、

取引所に参加する不特定多数の人の間で、自由に売り買いされるようになりました。

今お話したような、会社を所有する株券、お金を貸している証書、

綿（コットン）を所有する権利をしたための紙切れ、

これらはみな、資産や権利そのものを裏づけする「証書」として幅広く流通し、

今日では『有価証券』と呼ばれています。

有価証券とは、まさに価値を持った「紙切れ」であり、

今日の信用経済の礎となっています。ちなみに、マンハッタン島の港近くの

「交易所」のひとつが、現在のニューヨーク証券取引所であり、その昔、

牛や豚の「現物取引」が行われていた際、方々に散らばる動物を隔離するために

設けられた壁（ウォール）が、今日のウォール街の発祥なのです。